

採点競技スポーツにおける採点方法に関する研究 —特にフィギュアスケート競技に着目して—

福田 歩 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)
指導教員 菅井 京子

キーワード：採点競技 採点方法 芸術性

1. はじめに

2010年に行われたバンクーバー五輪では、フィギュアスケート男子シングルにおいて4回転ジャンプに関する問題が大きく取り上げられた。男子は4回転ジャンプを跳ばなければ勝てないという時代の中、4回転を跳ばず全体的にバランスの取れた演技構成で、出来ばえが大変良かった選手が優勝したというこの時の結果は、誰もが納得のいくものではなかった。技の正確性や美しさ、表現を重視した演技と、4回転ジャンプ等の高難度の技に挑み、難しさを重視した演技とではどちらがよいのだろうか。

本研究では、フィギュアスケート競技の採点方法とその評価要素を明らかにし、また、採点方法の改正の歴史をたどり、評価要素の重点の移り変わりを明らかにする。そして、今後のフィギュアスケート競技の採点はどうあるべきかを考察することを目的とする。用いる資料は『ISU Judging system テクニカルパネルハンドブック』、「フィギュアスケートの採点方法」、『キス・アンド・クライ=Kiss & cry』などである。

2. 結果と考察

フィギュアスケートが競技として成立した1890年頃は、「技術」を評価していたコンパルソリー、「技術」と「芸術」を評価していたショートプログラムとフリースケーティングの3種目で行われており、「6.0システム=ワン・バイ・ワン (ObO : One by One)」という採点方法が用いられていた。ObOは技術点と芸術点をそれぞれ6点満点で採点し、最終順位は各審判がつけた順位で決定されていた。このとき、「技術性」の評価の方に重きを置かれていたことがわかる。また、1991年にコンパルソリーが廃止され、「技術性」と「芸術性」の評価の割合がほぼ等しくなった。その後、ObOは芸術的評価の際に審判の主観が強く影響されるという問題がありながらも、採点方法を大幅に変更するまでには至らなかった。しかし、2002年のソルトレイクシティ五輪における順位不正疑惑が発端となり、採点から主観性を極力排除することを目指し、2003

年に「ISU ジャッジングシステム=コード・オブ・ポイント(CoP : Code of Points)」に改正された。これは現在も続いている採点方法である。このCoPはジャンプやスピン、ステップ等の各要素の基礎点と出来ばえを合計した要素点と、芸術的なものを評価した構成点を算出し、それらの点数から減点の合計点を引いた総合点によって勝敗が決する。採点の項目を細かく見てみると、「芸術性」を評価する項目は1つしかなく、「技術性」を採点する項目の方が多い。これは「技術性」に重きを置いているということである。その後、ルールは毎年少しずつ改正され、ますます技術性の追求に偏ってきている。

採点競技に求められているものは、本来「技術性」と「芸術性」である。現在までのルール改正により、高かった「芸術性」がどんどんなくなり、「技術性」と「芸術性」という2つの評価がアンバランスになってしまった。

3. おわりに

芸術的評価を数字で表すことは難しい。数字で表わしやすい「技術性」と、数字で表すことができない「芸術性」を合計し、その点数で勝敗を決めることには、どうしても矛盾がある。「技術性」と「芸術性」はもともとバランスがとれるものではないのかもしれない。しかし、「技術性」だけの、あるいは「芸術性」だけの競技としてのフィギュアスケートがあったとしたら、そのおもしろさは半減してしまうと考えられる。

参考文献

- ISU(International Skating Union : 国際スケート連盟) (2007),(2008),(2009),(2010) ISU Judging system テクニカルパネルハンドブック. ISU.
- 加藤茂(1999) 美と芸術. 高文堂出版社.
- ニコライ・モロゾフ(2010) キス・アンド・クライ=Kiss & cry. 講談社.
- 野々宮徹(1987) スケート競技. In 岸野雄三 スポーツ大事典. 大修館書店.
- 大島悠(2010) フィギュアスケートの採点方法. 21世紀スポーツ文化研究会.